

# 総合的事前判断

名誉教授 矢野 勝正

何事でも何か事を行おうとする場合に事前に総合的に有利な点、不利な点を予測検討して事業の価値判断を行うべきことの必要性については、今更こと新しく説くほどのことでもあるまい。しかしそうは言っても現実社会にはそうした吟味が十分行われないうままに着工され、後になって撤去しろとか、公害をなくしてくれとかとってさわぎたてる事例が多いことも周知のことがらである。

昭和35年チリ津波が東北地方を襲って大きな津波災害をひきおこしたことがあった。この時政府の調査団が編成されて私もその一員として現地を調査したことがあった。その時私にとってもっとも印象に残っていることは行く先々の部落に津波堤防建設反対というかんばんがかかわれていたことであった。一刻も早く津波を防ぐことの出来る頑強な海岸堤防をつくって欲しいというのと全く反対であるので、その真意のほどをよく聴いてみると、要するに高い頑丈な堤防を海岸線沿いに建設されると日常生活上例えば漁獲物を陸揚げして運搬するのに不便であるからということにあるらしい。50年に1回や100年に1回の津波に備える為の構築物の必要性より、日常生活の便、不便の問題の方が重視されていたのであろう。このような事例は土木計画の分野には数限りなく存在する。アスワン・ダムは世界的な問題としていろいろの角度からの批判がある。私もこのダム計画が発表された当時は非常に大きな興味と期待を抱いてその実現が一日も早いことを望んでいたが、今日完成してみるといろいろの苦情が出ているのに驚いた。極端な意見としてアスワン・ダムは世紀の大土木事業であったかも知れないが、同時に世紀の失敗でもあったと批判する人もいる。たしかにダムはどこの国でも言えることではあるが、大きな便益をもたらすが同時に思いもよらぬ不利益をも発生せしめている。河床の低下と上昇、内水災の助長、濁りの長期化、水温の低下等々多くの問題を同時にもたすのである。そうしたことの起らないように考慮や対策が行われているが、地元との紛争のもとになっている。

このような失敗や紛争をおこさないためには当然のことながら、計画当初からの事前評価とそれに対する対策を十分検討しておくべきことである。アセスメントの必要性の強調される所以であろう。

防災研究所も25年の星霜をけみした今日もう一度ふり返って自らのこれからの再出発的アセスメントを再吟味してみる必要もあろう。